

4月号営農インフォメーション

水稻・麦の管理のポイント

水稻・・・育苗～田植準備の時期です。

麦・・・タンパク含量向上のため実肥の施用を行います。

水稻

JA では、出芽苗、緑化苗、硬化苗と育成時期が異なる水稻苗を供給しています。多くの農家は育苗用のビニールハウスを所有されているので、出芽苗を購入し各自で育苗されています。作業的に管理が難しい方やハウスを所有されていない方は、引渡後すぐに田植え可能な硬化苗を購入されています。苗はJA 東びわこのビニールハウスで管理し、硬化苗に育成していますが、一部は農家に委託して管理してもらっています。

JA 東びわこで取り扱っている品種

種 類	品種名	成熟期	優れる性質
早 生	みずかがみ	8.24	極良食味、極良品質、高温登熟性強
	コシヒカリ	8.28	極良食味、穂発芽難
	キヌヒカリ	8.31	強稈、耐倒伏性、良食味
	ミルキークイーン	9.2	粘り強く食味の良い米
中 生	ゆめおうみ	9.8	極強稈、耐倒伏性極強
	日本晴	9.14	光沢良く外観品質良、多収
	秋の詩	9.19	大粒、極良食味、穂発芽難
	玉 栄	9.16	大粒、多収、酒造用好適
	きぬむすめ	9.24	高温年でも上位比率が望める
晚 生	滋賀羽二重糯	9.19	もち質良好
	吟吹雪	9.24	心白極多、酒造用好適

箱苗利用料金 全品種（滋賀羽二重糯を除く）

種 類	引渡後の管理期間
出芽苗	ハウス等で17日程度
緑化苗	ハウス等で14日程度
硬化苗	必要なし

※事前にご注文いただいた数量で管理しています。追加で苗を注文される場合は、管轄の営農経済センターにお問い合わせください。

① 出芽期の管理

出芽の適温は昼間、夜間共に30～32℃です。出芽の温度がこれより高くなると、もみ枯細菌病やリゾープス菌などによる苗立枯病が発生しやすくなるため注意が必要です。

② 緑化期の管理

出芽苗を直射日光に当てると、緑化しなくなる白化現象が発生するため、育苗器からハウスなどへ出す場合は、早朝か夕方に行ってください。適温は昼間22～25℃、夜間15～18℃で、規定の温度以下になると生育が抑制されるためハイマットなどの被覆資材を用いて温度管理を行うなど十分注意が必要です。

③ 硬化期の管理

硬化期は苗の生長を促し、充実した活着のよい苗に育てるよう管理します。外気に慣らし、日光に十分当ててください。適温は、昼間は18～20℃、夜間は12～15℃で、日中最高温度が35℃以上、夜間の最低気温が10℃以下にならないように管理します。移植が近づけば、特に寒い日以外は、ハウスを開け放ち苗の硬化に努めます。晴天時、水不足にならないように午前・午後の灌水が必要となります。



図1：ビニールハウスでの育苗管理

硬化期は外気にならし、健全な苗づくりを行います。

育苗期間の適温

期間	出芽期間	緑化期間	硬化期間
昼夜別	2～3日	2～3日	4～16日
昼間	30～32℃	22～25℃	18～20℃
夜間	30～32℃	15～18℃	12～15℃

④ 濁水対策

水田から流出する濁水が琵琶湖等への環境負荷の要因となっていることから、代かきなどの本田準備から田植えにかけての作業は濁水対策（浅水での作業など）に最も配慮が必要です。



図2：荒神山から見た濁水の様子



図3：宇曾川から琵琶湖へ流れる濁水の様子

⑤ 移植（田植え）

高品質、良食味米生産のために次の事項を実践するよう指導してください。

- 遅植えの実施（5月連休以降の田植え）
- 10a当たり18箱以内を基準に、坪当たり50～60株以下の疎植
- 株当たり3～4本の細植え（圃場条件に応じ極端な細植えには注意が必要）
- 補植は最小限に抑える（連続して欠株が5株以上ある場合にのみ2～3株を補植）
- 初中期一発剤（初期剤）除草剤散布後は、土壤に除草剤による処理層ができるため散布後1週間は圃場内に入らない
- 苗が活着するまでは水深を5～7cmの深水で管理し、低温や風による植傷みを防ぎます。活着後は、稲の分けつを促進させるため水深2～3cmで管理しましょう。
- 予備苗は早期に処分する（圃場の隅で補植用に残している場合がありますが、病虫害発生要因に繋がるため）

⑥ 基肥の施用

水稻の肥料は、基肥施用時に水稻の収穫までに必要な肥料分を施用する一発型。基肥、追肥、穂肥と複数回に分けて施用する分施型があります。基肥の施用方法は、動力噴霧機による全層施肥。田植機で田植えと同時に施用する側条施肥の2種類があります。

※側条施肥の場合は、田植え前に機械を調整して規定量の肥料が落ちているか確認してから作業を行ってください。

※前作が大豆の場合は、土中に窒素成分が残っているので、基肥の施用量を調整します。

小麦

○生育状況（4月8日時点）

3月が低温で推移したため進んでいた生育は停滞し、平年並～やや早い程度の生育進捗となっている。播種時期の早かった一部の圃場では穂揃期を迎えている。

近年、11月上旬の気温が高い年が多く、本年作も播種時期の早い・遅いにより生育の差が見られます。

排水対策では、排水不良は根の伸長を妨げ、登熟期まで影響が及び、収量および品質低下を引き起こすので、溝に水がたまる場合には溝さらえを行うなど、引き続き徹底した排水促進に努めることが大切です。

平均一覧	草丈	茎数	茎数(本/㎡)
彦根(甘呂)平均	86.5	119	397
愛荘町(東円堂)平均	67.6	110	367
稲枝(新海、田附、田原)平均	74.4	115	464
東部(雨降野、八町、金屋、檜崎、木曾、千尋)平均	66.6	115	461
総平均	71.0	114	450

○赤かび病防除

赤かび病は、子実の合わせ目にピンク色のかびが生じる病害で、出穂から乳熟期の2週間の間が最も侵されやすく、この期間に曇天で、小雨が続き、湿度が高いと多発します。赤かび病の毒素は毒性が強いため、基準値を超えた場合は販売できません。赤かび病予防のため、開花期頃（4月中下旬頃）の2回防除を必ず実施してください。第1回目防除は開花期に実施し、第2回目の防除は1回目散布後から7～10日後に実施します。



図4：無人ヘリを活用した赤カビ防除

※赤かび病の毒素（DON）は毒性が強いため、暫定基準値（DON：1.1ppm）を超えた被害粒は市場流通することができない為、経営所得安定対策の交付金は対象外になるので注意してください。

防除薬剤（例）

品種	農薬名	使用方法散布：希釈倍数	10a当たりの 使用量・希釈倍数	収穫前日数	使用回数
ふくさやか	トップジンMゾル(液剤)	無人ヘリ・ドローン（8倍）	0.8ℓ	14日前まで	2回以内
		セト噴射・ピークル等散布 (1,000～1,500倍)	60～150ℓ (1,000～1,500倍)		
	ワグアップフロアブル	ピークル等散布	25ℓ（500倍）	7日前まで	3回以内
	チルト乳剤25	無人ヘリ・ドローン（8倍）	0.8ℓ	7日前まで	3回以内

無人ヘリ・ドローンによる防除での薬剤量と水量（10a当たり）

[トップジンMゾル（液剤）・チルト乳剤]薬剤 100ml に対し水 700ml 合計 800ml (0.8ℓ)